

図11-2. 性器ヘルペスウイルス（初発） 医療機関ごとの発生件数（2008年）

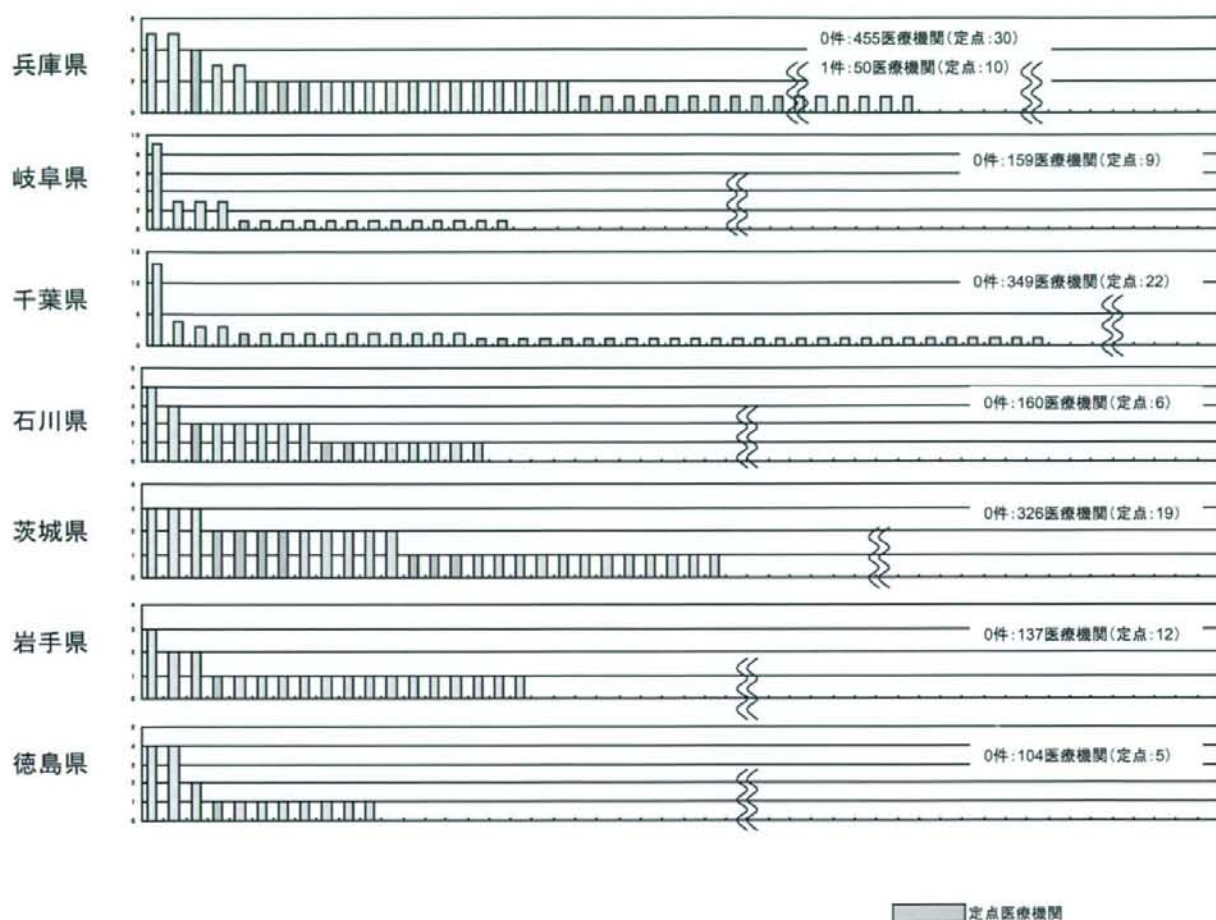


図11-3. 尖圭コンジローマ 医療機関ごとの発生件数（2008年）

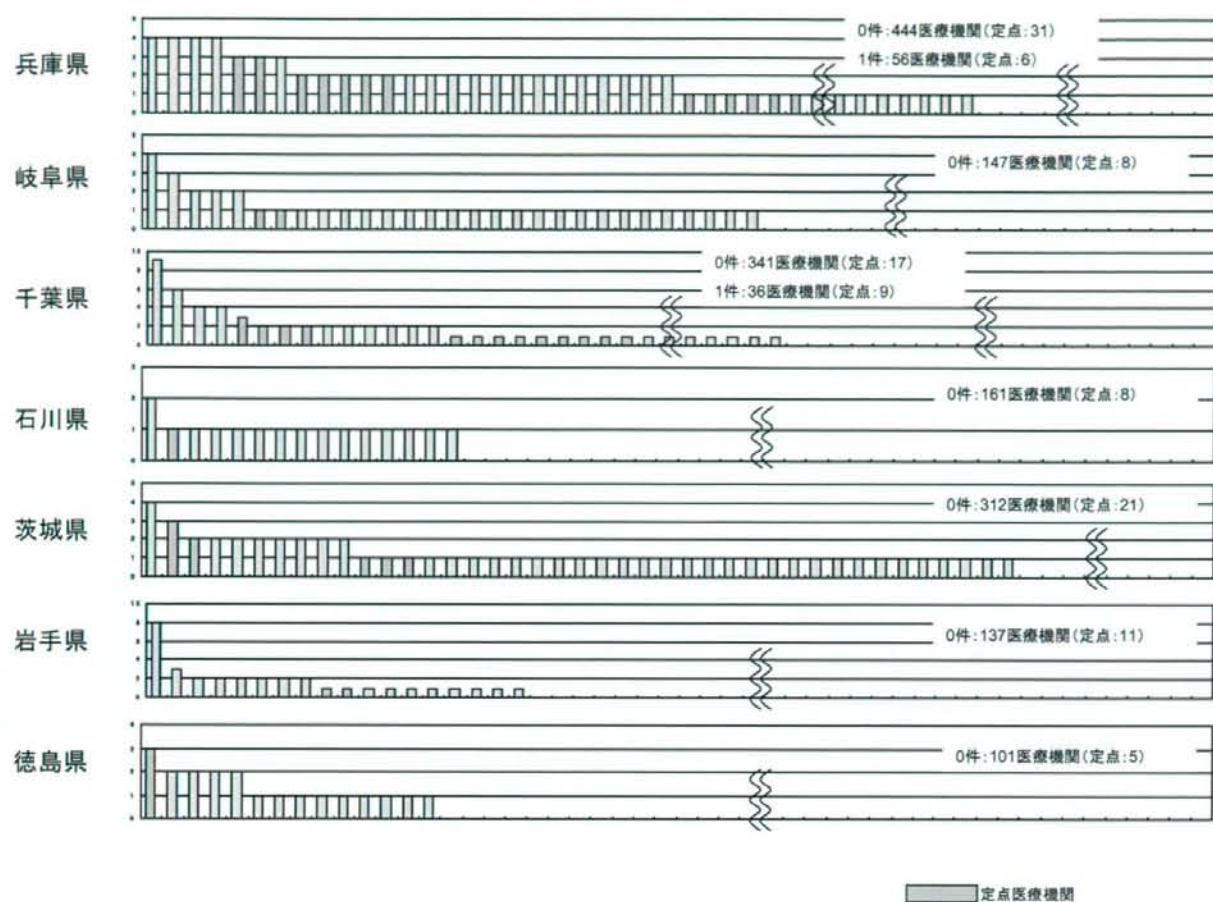


図11-4. 性器クラミジア感染症（発症者） 医療機関ごとの発生件数（2008年）

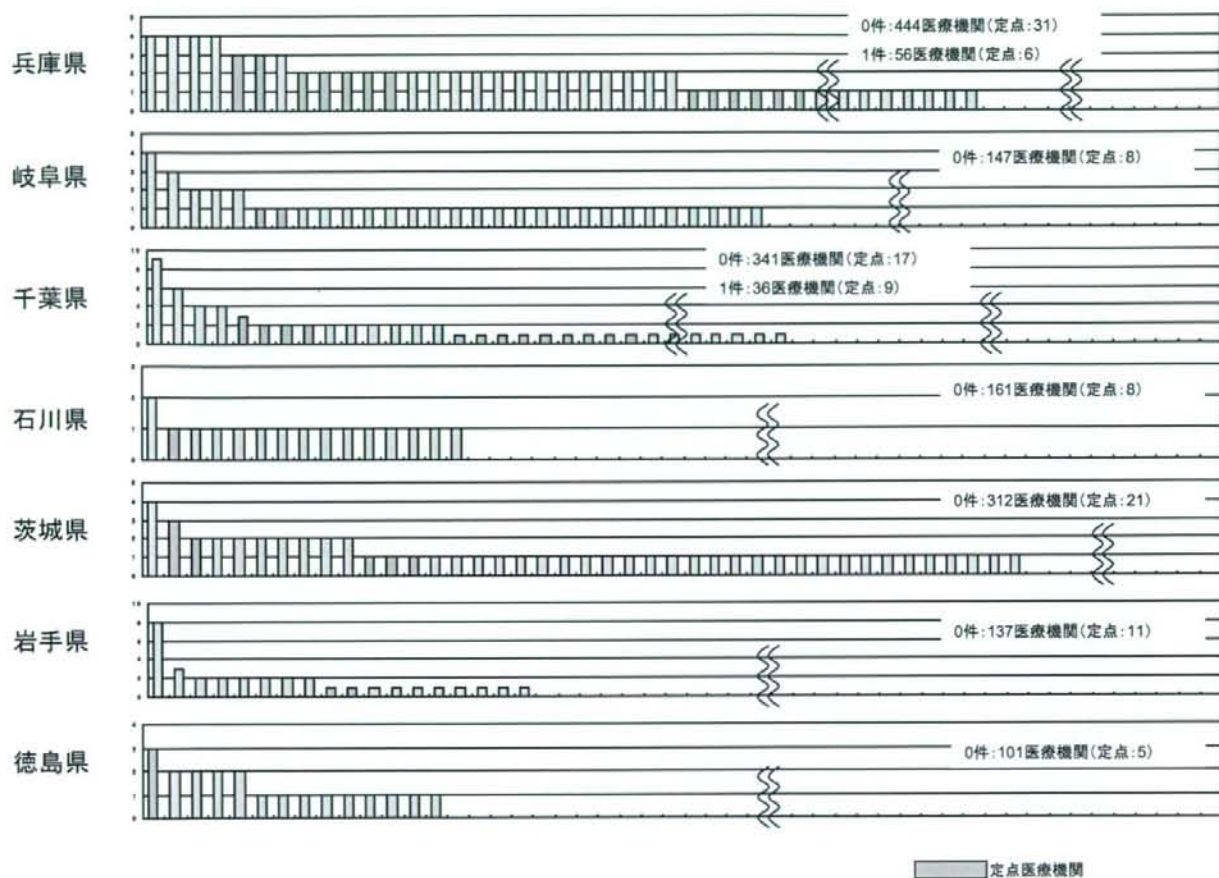


図12-1. 淋菌感染症 医療機関ごとの発生件数 (2007年)

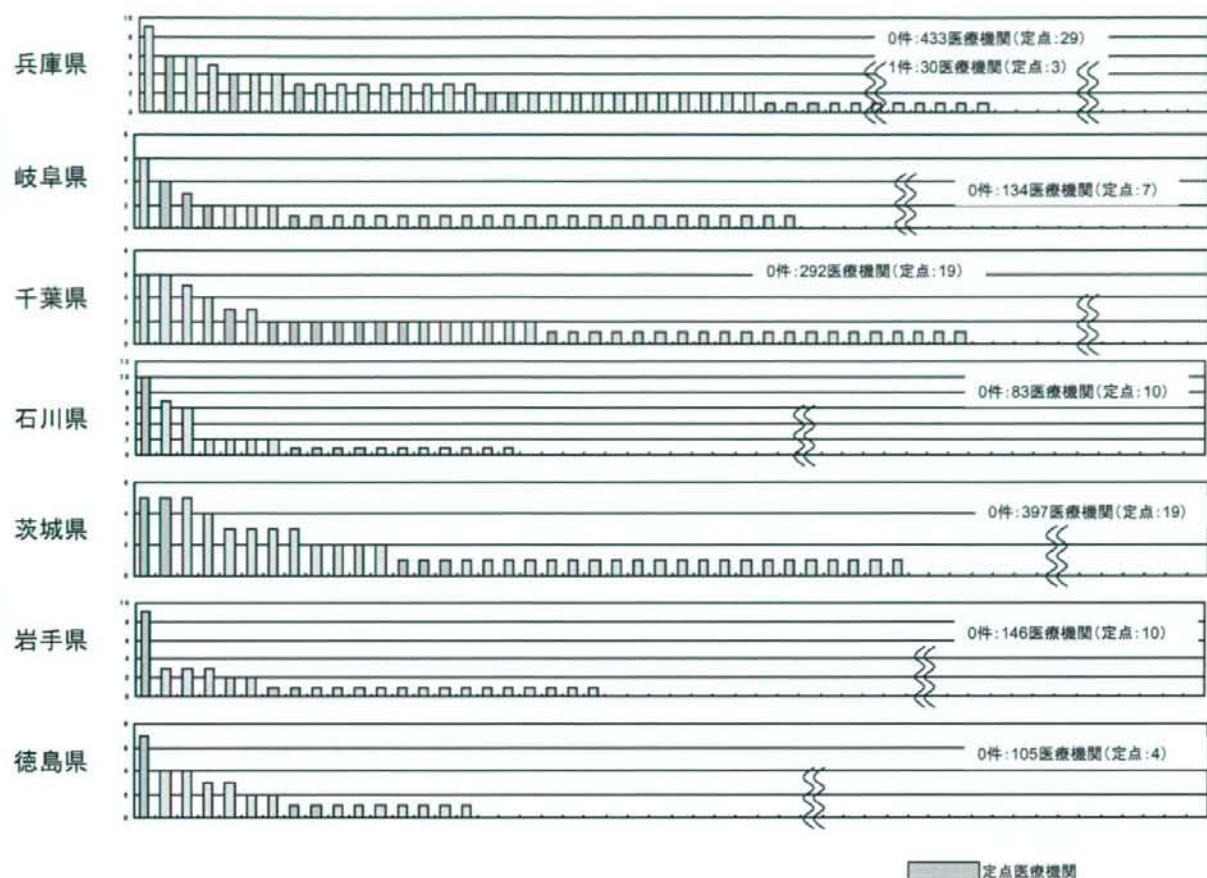


図12-2. 性器ヘルペスウイルス（初発） 医療機関ごとの発生件数（2007年）

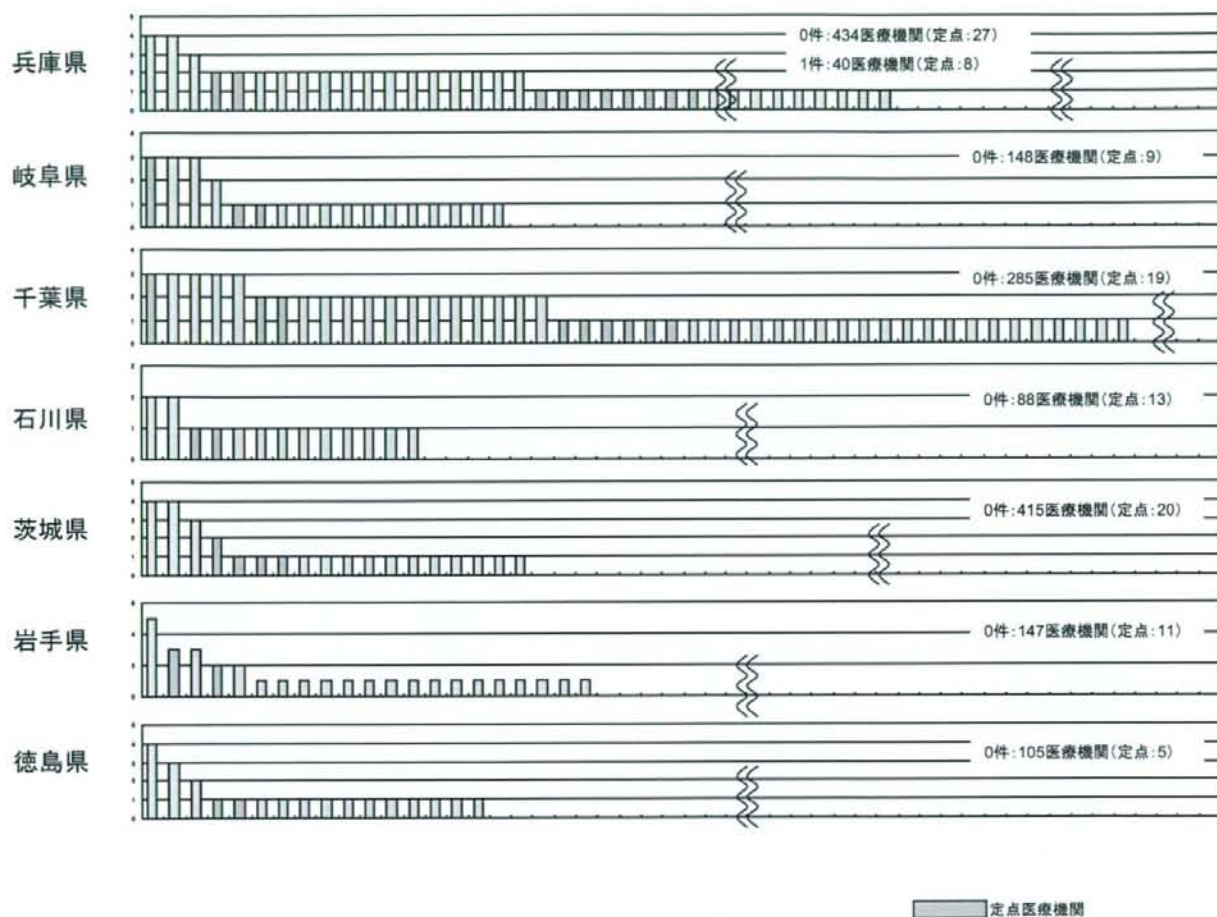


図12-3. 尖圭コンジローマ 医療機関ごとの発生件数 (2007年)

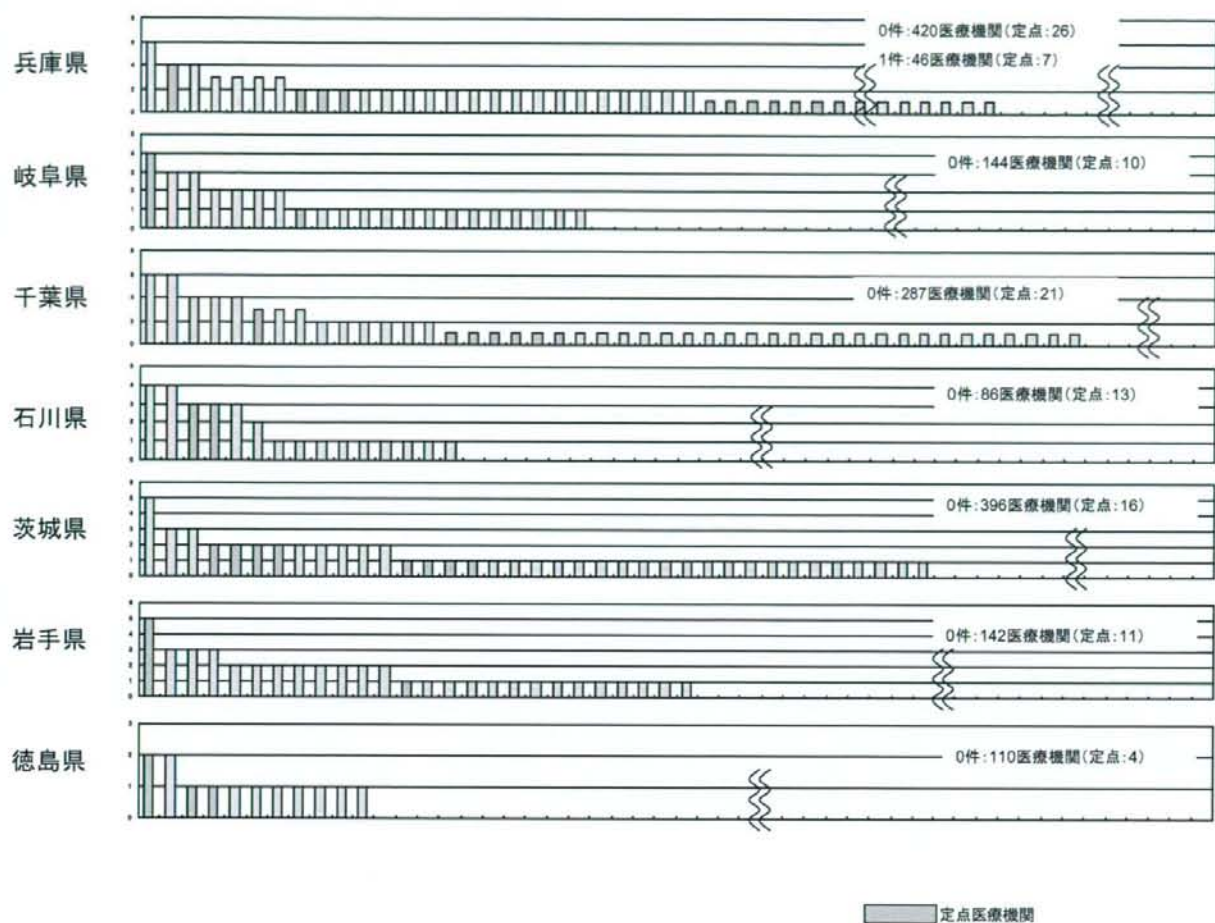
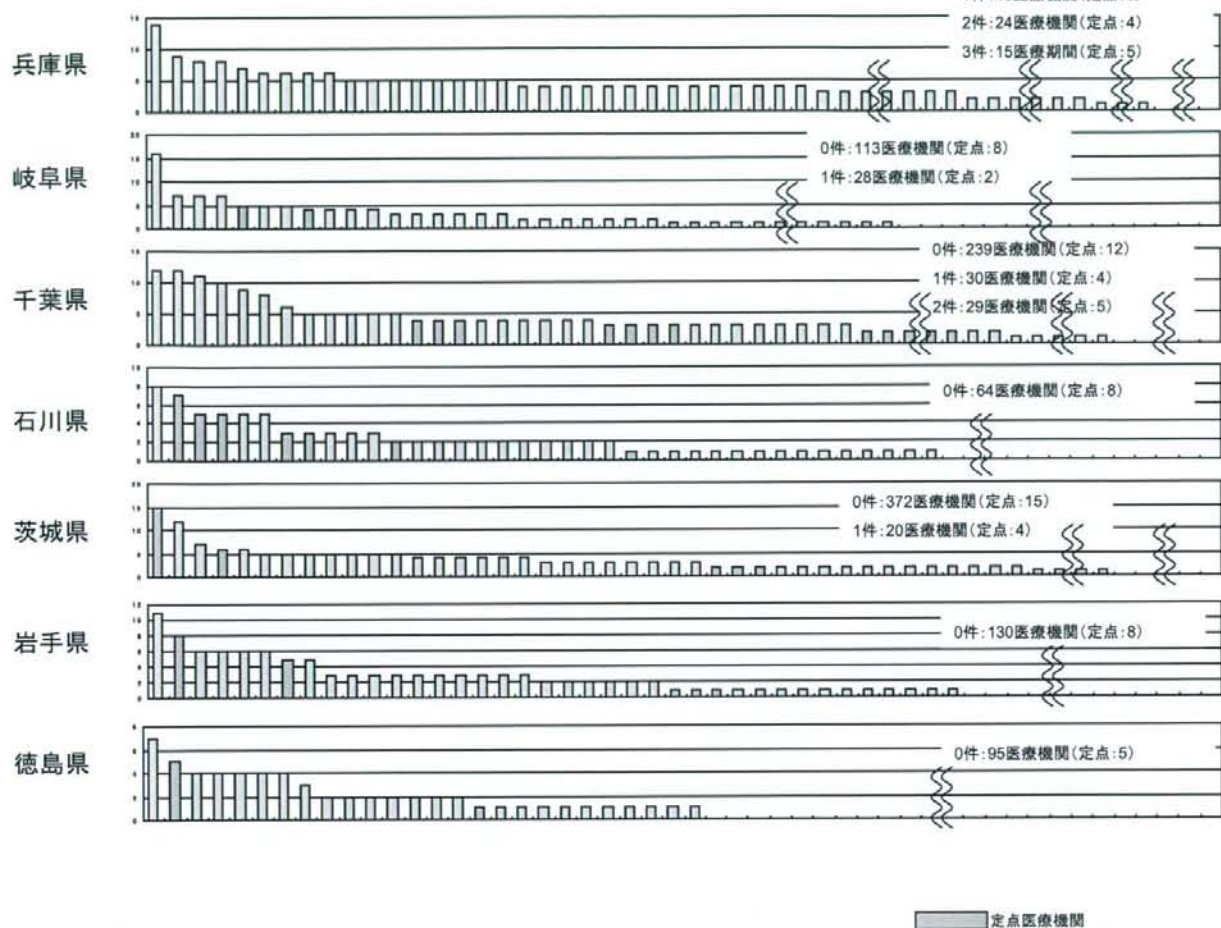


図12-4. 性器クラミジア感染症（発症者） 医療機関ごとの発生件数



2. 若年者の性感染症を早期に発見し、

治療に結びつけるための試行的研究

平成 20 年度厚生労働科学研究補助金(新興・再興感染症研究事業)
性感染症に関する特定感染症予防指針の推進に関する研究
(主任研究者：小野寺昭一)

若年者を対象とした性器クラミジア感染症の自己検査の推進と
早期発見・治療のための体制づくり

研究要旨

性感染症に関する特定感染症予防指針に示されている若年層を対象とした性感染症予防対策について、昨年度に引き続き、若者向けイベントを活用し郵送による自己検査(Chlamydia trachomatis PCR法)を行った。検査勧奨は昨年度作成した「検査コーディネーターになるあなたへ、虎の巻」を使って、検査コーディネーターを養成し、学園祭や野外イベント16か所で実施した。検査キット配布総数 2,226 件のうち、検体回収 557件(25%)、アンケート回収 545 件(24%)であった。無症状の若年者における Chlamydia trachomatis PCR 陽性率は、男性(尿)3.7%、女性(膣スミア)6.1%であった。今年度の一部(78人)で咽頭スミアによる性器クラミジアと淋菌の検出をそれぞれ SDA 法で併用したところ、女性1人が膣と咽頭のいずれからも Chlamydia trachomatis が検出された。咽頭淋菌については女性4人、男性1人が SDA 陽性であった。男性での咽頭から Chlamydia trachomatis SDA では検出がなかった。

アンケートは、検査提出時に性行動について記入するものと検査照会時に携帯メール(または PC)で検査を受けた感想などを聞いたところ、自己検査の受け入れは肯定的で有効であると考えられた。

また、全国の保健所(517か所)に「性感染症に関する特定感染症予防指針」改正後の性感染症対策について、アンケートを実施したところ、改正のポイントとなった「各種行事を活用した若年者への啓発・相談・検査勧奨」と「検査機会の拡大」については、約半数で対策に反映していたが、定点医療機関の見直しについては、16%の保健所が「改正のポイントを知らなかった」と答えた(回収率 40%)。

分担研究者：小野寺昭一

(東京慈恵会医科大学感染制御部)

研究協力者：白井千香(神戸市保健所)

渡部享宏(Campus AIDS Interface) 中瀬克己

(岡山市保健所) 野々山未希子(東邦大学)

A. 研究目的

H18 年 11 月末改正の「性感染症に関する特定感染症予防指針」に示された若年層を対象とした予防対策の推進に向けて、H18 年度、H19 年度に引き続き、性感染症スクリーニングの自己検査を普及し、無症状者の病原体保有の実態を探る。また若年者向け各種イベントを通して、検査コーディネーターを養成し、若年者のエンパワーメントを促す。さらに、予防指針改正後の保健所の性感染症予防対策の現状を調査し、課題について考察する。

B. 対象・方法

① イベント時の自己スクリーニング検査の導入と性行動調査

対象を 25 歳までとし、男性は初尿、女性は膣スミアを検体とするクラミジア自己検査郵送用キットと性行動や感染予防、受診等に関するアンケート用紙を、16か所のイベント時に検査コーディネーターから説明を行って配布した。今年度は一部のイベント会場で78人に、咽頭スミアによる Chlamydia trachomatis と淋菌の検出をそれぞれ SDA 法で併せて試行した。検体を自己採取後、匿名で郵送し、結果の照会は性感染症検査結果照会サービスとして当研究班専用のホームページ ([http:// www.kensa.org/](http://www.kensa.org/)) へ、携帯電話や

PCでインターネットからアクセスし、ID番号の入力によって確認することとした。検体検査はPCR法（ロシュ）により、三菱化学メディエンスで行った。回答した性行動アンケートは検体提出時に同じく匿名で同封し郵送で回収した。結果通知後の意識や検査を受けた感想については携帯Web上（またはPC）での回答方式を試行した。

② 検査コーディネーターの養成について

NGOであるCAI（Campus AIDS Interface）の呼びかけ（インターネット上の公募およびメーリングリストでの情報提供）によって、30歳未満の若者を募った。経験のある検査コーディネーター以外は研修を行った後に、検査キットの配布を中心にピアエデュケーションとして、イベント時に自己検査を促す啓発活動を行った。

③ 全国の保健所517か所へ、4月に「検査コーディネーターになるあなたへ、虎の巻」を配布し、若年者の性感染症予防対策に自己検査キット配布を導入する契機を持った。それを踏まえて、全国保健所長会を通して、8月（返信数が少ないため、10月に再依頼）に、この「虎の巻」の印象と「性感染症に関する特定感染症予防指針」改正後の性感染症対策について「指針」が対策に反映しているかどうか、e-mailまたはFAXによるアンケートを行った。

<倫理的配慮>

- ・検査協力者へ紙面による説明を行い、本人自署の同意書を提出してもらった。これらについても検査コーディネーターの役割に含めた。
- ・検査結果の還元を検者協力者本人（希望者）へ可能とした。
- ・研究結果は特定の個人を同定できないよう報告することとした。
- ・これらの方法は、主任研究者の所属する慈恵会医科大学の倫理委員会で承認されている。

C. 結果

① イベント時の自己検査について

クラミジア自己検査キットの配布場所及び配布数と検体回収数と回収率は、報告書の末尾の別表1に示した。自己検査キットを配布したイベントは平成20年4～11月に実施され、その内訳は関東地区12（街頭イベント9、学園祭1）、関西地区3（街頭イベント1、学園祭2）、岡山3（街頭イベント1、学園祭2）計16か所であった。なお、東京での3大学の会場を学園祭1として計上している。池袋保健所のHIV/AIDS情報ラウンジ“ふぉー・てい”では、若者のピアエデュケーションとして、検査キットを常設し配布した。

H21年度の合計は、検査キット配布数2,226（男916女1,310）、うち検体回収数（回収率）は557（25%）で、性別では、男181（20%）、女376（29%）であった。

Chlamydia trachomatis PCR陽性者（陽性率）

男7/181（3.7%）、女23/376（6.1%）であった。アンケート回収数（回収率）は545（24%）で、性別では男165（18%）、女380（29%）であった。10代の陽性者は男性8人中0で、女性は43人中3人であった。配布場所による陽性率は、アースガーデン（夏）で20人中3人（15%）と一番高かった。H20年1～12月に常設した池袋保健所HIV/AIDS情報ラウンジ“ふぉー・てい”では、検査キットは175人に配布し11人から回収され、検査陽性者はいなかった。（別表2）

咽頭スメアによる性器クラミジアおよび淋菌（SDA）陽性について

男19人中0人、女59人中1人検出され、女性は膣スメアでも陽性であった。咽頭スメアによる淋菌陽性（SDA）は、男19人中1人、女59人中4人であった。淋菌陽性の5人について、性器クラミジアは尿及び膣スメアから検出されなかった。このうち男性1人はアンケート提出

者ではなかったもので、性行動の詳細は不明であるが、女性は「コンドームをせずにセックスすることがある」と答えており、フェラチオで咽頭に淋菌が感染していることが考えられる。

性行動アンケート調査の集計

検査陽性者について述べる。H20年度の性器クラミジアPCR陽性者30人のうち、アンケートを提出したのは、女性23人中20人、男性7人中6人であった。アンケートの回答から、コンドームの使用目的は性感染症予防よりも避妊に置かれ、男女とも膣性交およびフェラチオでは「コンドームを使わないことがある」と答えていた。この回答は陰性者より陽性者が多かった。よって、陽性者ではコンドームを常用していない場合が多いことが示唆された。

検査照会時の携帯メールまたはPCのWeb上でアンケート

検査を受けた感想などについて、web上でアンケートを行ったところ、陽性者30人中15人が回答した。

15人全員(100%)が「受けてよかった」「スタッフの説明を安心して聞くことができた」「簡単に検査できた」と答えており、「無料だからよかった」と答えたのが80%、「家で手軽に検査できる」「恋人にも検査を勧めたい」と答えたのは73%、「友達にも検査を勧めたい」「匿名でよかった」と答えたのは60%であった。ただし、「コンドームでいつも感染予防をしたい」と答えたのは53%にとどまり、「定期的に検査を受けたい」「感染症が身近なものと感じた」と答えたのが40%、「必要な時に検査を受けたい」「症状がひどくなる前に治療することができる」と答えたのは33%であった。「結果を知ってどうするのか」「陽性の結果を信用できない」「不安になった」という自由記載が1件ずつあったが、1人を除いて、「また受けたい」と答えており、概ねこの自己検査については肯定的であった。

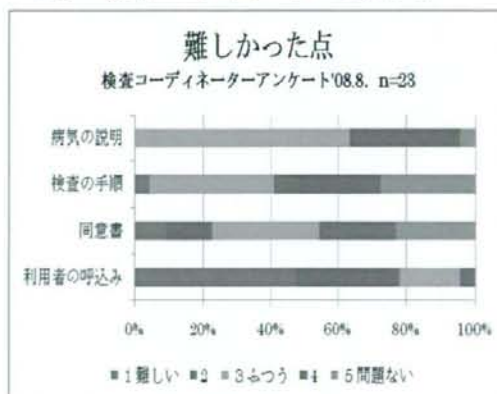
② 検査コーディネーターの養成について

ピアエデュケーション活動は、自分自身が性感染症について知識を得るとともに、同世代へ検査の必要性を説くことから、性感染症やエイズについて話すきっかけになった。ただし、活動として一番難しかったのが、検査キット配布への呼び込みであった。今年度、岡山であらたに養成された検査コーディネーターのうち23人からのアンケートの結果を、下図に示す。

図1 検査コーディネーターの効果



図2 検査コーディネーターの難しさ



次に、検査コーディネーターを経験した感想を抜粋する。

「男性と女性で意識の差がよくわかった」「男が簡単に意識が低いかわかって(ある意味)よかった」「特に男性の意識の低さが目立っていたように思うので、呼びかけの方法に工夫がいとと感じた」

「女子高生がとても興味を持ってきて驚いたが嬉しかった」などである。

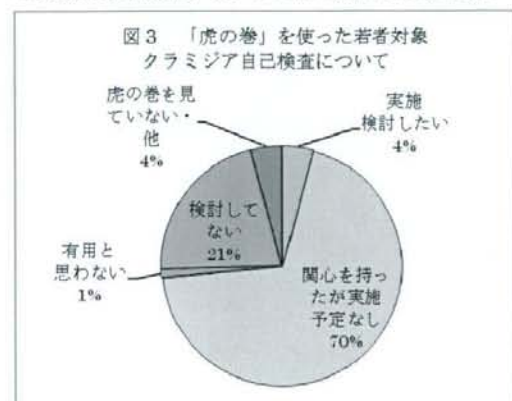
また、常設した池袋保健所「ふぉー・ていー」ではスタッフから「来館者が何らかのニーズを持っており、その時その瞬間に検査キットを渡すことができた」「スタッフが若いので、若い人へのアプローチがしやすかった」という感想があり、利用者からは「毎日開いているので、アクセスしやすかった」「病院に何度も行かなくていい」「お金がかからない」「保険証を提示しなくてもいい」「匿名でもいい」「持ち帰って好きなところで検査できる」という利点が評価された。

③ 全国保健所アンケートについて

H20年4月に全国の保健所517か所を対象に「検査コーディネーターになるあなたへ、虎の巻」を送ったことから、それを読んだ印象や研究事業への関心を、全国保健所長会を通して、E-mailで尋ねたところ、206か所の保健所から回答があった（回答率40%）。206か所の保健所を設置主体別に区分すると、県型保健所163か所、指定都市および特別区保健所17か所、中核市および政令市保健所26か所であった。

1) 「虎の巻」に関する印象や若年者への啓発

虎の巻と当研究班事業の概要に興味を持ったのは、73%だったが、ピア活動による郵送自己検査の実施を検討したいというのは4%だった(図3)。

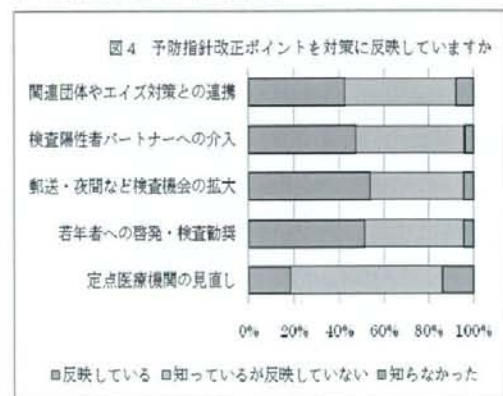


若年者を対象とした性感染症対策は、健康教育やピアエデュケーション、入学時オリエンテーション、大学祭など35%の保健所で実施しており、その60%はHIVと性感染症と連携して実施していた。

2) 保健所での性感染症検査・相談の実施状況

206か所の保健所のうち、梅毒137か所、性器クラミジア131か所、淋菌16か所、HBV166か所で検査を実施していた。性器クラミジア検査の多くは、HIV抗体検査と同時に採血をして、血清抗体で感染の有無をみていた。迅速検査法を用いているのは、梅毒については18か所、性器クラミジアは2か所あった。性器クラミジアの病原体検査を行っていたのは21/131か所(16%)のみであった。よって、性器クラミジアの病原体検査は、現行では自治体のスクリーニング検査としてはまだ普及していない。

3) 「性感染症に関する特定感染症予防指針」で改正のポイントとなった「各種行事を活用した若年者への啓発・相談・検査勧奨」と「検査機会の拡大」については、約半数の保健所で対策に反映していると答えていた。なお、保健所設置主体別では、県型や政令指定都市と比べて、中核市や保健所政令市において予防指針を対策へ反映している割合が高かった。しかし、定点医療機関の見直しについては、保健所の多くは対策へ反映するのが難しい様子で、16%の保健所で「改正のポイントを知らなかった」と答えていた(図4)。



保健所の性感染症予防事業について、現状や課題を示した自由記載の一部を以下、抜粋する。

・性感染症対策は法律に基づき事業展開をしてきた経緯がある。しかし、感染症と難病などを担当しているため、優先度が低い現状となっている。

・性感染症については、日常のエイズ相談業務、世界エイズデー関連イベント、出前講座を中心に実施している。担当者数が性感染症と結核業務で2人と限られているので、性感染症までは、手が回らない。

・HIV以外の性感染症対策の必要性を感じるが、マンパワーおよび財政上実現は困難。

・人口が少なく、高齢化人口が多い地域であるが、中学生・高校生の性行動は地域格差が無いことを養護教諭等から情報が有り、若年者に対する啓発や相談は必要であると考え、効果的な取り組みについて保健所内で検討している。

・性感染症の定点医療機関からの報告は少ないが、地域には定点以外にも産婦人科・泌尿器科・感染症科があるので、今後は医師会や医療機関と連携した予防啓発・早期発見などに向けて取り組みが必要。

・保健所の性感染症検査は平日であることから、若年者のニーズにあった検査体制の検討も必要と考える。

・自己検査法(郵送検査)の導入は、性感染症予防に関する正しい知識の普及啓発を兼ねると考えられる。しかし、地域事情等を考慮すると、この検査キットを各種イベント会場で配布することは、関係者に混乱を招く恐れがあり、まずは学校教育(保健所活動と連携)の充実が求められる。

・性器クラミジア感染症及び淋病感染症については病原体検査を基本とし、男性は尿、女性は膣ぬぐい液の自己採取による核酸増幅同定検査を業者委託により実施している。

D. 考察

① イベント時の自己検査について

検体配布数は毎年約2,000キットであるが、検査陽性者の割合は、調査年によって変動があ

る。被検者の年齢層にもよることが考えられる。今年度も昨年度と同様、イベント時に検査キットを受け取った10代の若年者は全体の10%程度であった。高校生はイベントへの参加自体が少ないと思われる。

検査陽性者の性行動アンケートからは、必ずしも初交年齢が低いとか、セックスの相手が多いからといって、検査陽性になりやすいという結果は得られなかった。陰性者と比べると、コンドームの使用目的(性感染症予防よりも避妊を優先)やセックスのときに常用しているかどうか、の項目で差が見られた。陽性者が検査結果を知った時にどう感じたかをweb上のアンケートで尋ねたところ、「受けてよかった」という反応であったが、「これからコンドームをいつも使って予防しよう」と回答したのは約半数に過ぎなかった。感染リスクを減らすような行動変容を促すにはさらに介入が必要である。

今回、一部の会場で性器からと咽頭スミアからの病原体検出を試みたところ、性器クラミジアは陰性で淋菌SDAが陽性という結果が、検体提出者の女性の7%でみられ、妊娠に関係しない性行動ではコンドームは全く使わないという傾向がわかった。これらの陽性者では、最近1年間のセックスの相手は1~3人で、初交年齢も特別低くない。感染リスクはコンドームで予防できない性行動にあると思われた。

② 検査コーディネーターの養成について

被検者のアンケートから性についての相談はまず、「友人」「彼・彼女」というのが多く、同世代のピアエデュケーションとして啓発の効果が期待できる。特に男性では「友人」に相談し、その友人が「彼・彼女」に相談するということが想定されるので、正しい情報の伝達の手段がこのような流れで進むことは悪くない。検査コーディネーターが、性感染症検査の必要性と検査の手順を説明することは、若者自身の知識や

意識の向上につながる。ただし、「自分も検査を受けてみた」というのは3割に満たず、自分自身の感染リスクを知る行動へは、つながりにくいのか、「自分は大丈夫」と思って検査コーディネーター活動を行うのか、当事者性を共有するには、別の工夫が必要かもしれない。また、検査コーディネーターとして養成された若者は学生であることが多く、一回限りのイベント参加に終わってしまうこともある。この活動に継続性が保たれるのか、また、後輩などへの継承ができるのか、他の自主的な活動に発展させることができるのか、が課題である。

③ 全国保健所アンケートについて

517か所の保健所からの回答が206か所と4割にとどまったことと、5年前に「性感染症に関する特定感染症予防指針」の改正前の保健所アンケートでは約6割の回答率であったことを考えると、全国的には保健所における性感染症予防対策の位置づけや関心が低下しているのではないかと懸念する。保健所では性感染症対策に専任の担当者が配置されていないことも多く、HIV/AIDS対策と比べて、性感染症対策の優先順位が低いことが課題である。しかし、アンケートに回答した保健所からは、現状に対する課題も踏まえながら、地域の関連機関と協力して、若年者向けの予防啓発を行っていることがわかり、自由記載では詳細で熱心な事業を展開していることも示唆された。全国一律でなくても地域特性を生かした予防啓発について、医療機関や他の関係機関との連携は、むしろ進んでいくであろうと期待する。当研究班とは事業の紹介や調査研究を通しての連携も可能であろう。

E. 結論

若年者にとって、自己検査はアクセスの良いスクリーニング方法である。若者による同世代の検査コーディネーターの存在はその推進に役立つと考えられる。ただし、特に10代を対象と

するには、イベント時で配布する自己検査キットは普及しにくいと考えられる。さらに若年者を早期の診断、治療につなげるためには、受診者側の若年者のニーズと医療側の受診体制の整備を考慮する必要がある。プライバシーが保持され、安心して検査と相談が受けられる環境整備が必要である。若年者（特に10代）の性感染症の拡大防止には、若者に信頼される医療の受け皿を増やすことが重要である。

保健所は、性感染症予防対策の必要性は認識していたが、人員不足や優先順位が低いという課題があった。保健所は行政として現場に近いだけ、“若年者”という当事者を対象に、感染症対策と思春期対策の両者からのアプローチを地道に続けていく必要がある。

F. 発表

1. 論文発表（寄稿）

- 1) 野々山未希子:性器クラミジア感染症の自己検査の推進と「早期発見のための体制づくり」, 性の健康 Vol.7 No.1 2008
- 2) 白井千香:性感染症対策の現状と課題～地域での取り組み, 特集「若者を性感染症から守る」公衆衛生 Vol.72 No.6 2008

2. 学会発表

- 1) 小野寺昭一:若者における無症候性の性感染症の実態, 日本性感染症学会合同シンポジウム; 日本エイズ学会第22回学術集会平成20年11月(大阪)

謝辞: 今回の調査研究において、蒔野絵里子氏、須藤文氏、戸田かな子氏(CAI)、森脇俊氏(守口保健所)、尾本由美子氏(池袋保健所)、佐藤要子氏(西宮市保健所)にご協力をいただきました。紙面にて厚くお礼申し上げます。

別表1 検査キット配布場所

	平成20年度 イベント名	配布数			検体返信個数			検体返信率		
		男	女	合計	男	女	合計	男	女	合計
	渚音楽祭 in 東京	40	56	96	17	23	40	42.5%	41.1%	41.7%
	アースデイ東京	76	154	230	20	56	76	26.3%	36.4%	33.0%
	渚音楽祭 in 大阪	31	41	72	1	10	11	3.2%	24.4%	15.3%
	ワンラブジャマイカ	83	114	197	23	46	69	27.7%	40.4%	35.0%
	バングラディッシュ フェスティバル	39	61	100	13	26	39	33.3%	42.6%	39.0%
	アースガーデン夏	31	46	77	7	13	20	22.6%	28.3%	26.0%
	桃太郎祭	88	195	283	19	38	57	21.6%	19.5%	20.1%
	ディワリ in 横浜	26	27	53	6	15	21	23.1%	55.6%	39.6%
	大阪国際大学	54	132	186	11	22	33	20.4%	16.7%	17.7%
	アースガーデン秋	25	48	73	12	20	32	48.0%	41.7%	43.8%
	渋谷ピース祭	19	18	37	5	10	15	26.3%	55.6%	40.5%
	TDF	24	31	55	1	17	18	4.2%	54.8%	32.7%
東京 学園祭	日体大	248	195	443	26	57	83	10.5%	29.2%	18.7%
	麻布大学									
	法政大学									
	神戸大学祭	30	20	50	11	3	14	36.7%	15.0%	28.0%
	鹿田祭	1	7	8	1	3	4	100.0%	42.9%	50.0%
	岡山大学祭	31	60	91	5	9	14	16.1%	15.0%	15.4%
常設	池袋保健所	70	105	175	3	8	11	4.3%	7.6%	6.3%
計	16 イベント	916	1310	2226	181	376	557	19.8%	28.7%	25.0%

別表2

H20年	配布数	検体返信数	返信率	陽性数	陽性率	備考
男性	916	181	20%	7	3.7%	10代 陽性0
女性	1310	376	29%	23	6.1%	10代 陽性3
計	2226	557	25%	30	5.4%	
アースガーデン 夏 (再掲)	77	20	26%	3	15%	陽性率が最高だったイベント
保健所常設 1~12月 (再掲)	175	11	6.3%	0	0%	HIV/AIDS情報ラウンジ “ふぉー・てぃー”

厚生労働科学研究費補助金（新興・再興感染症研究事業）
性感染症に関する特定感染症予防指針の推進に関する研究

性の健康相談室を通じての性感染症の蔓延防止に関する研究

研究分担者 松田 静治（（財）性の健康医学財団 理事長）
研究協力者 小島 弘敬（東京都南新宿検査・相談室）

研究要旨

本研究では、性的活動が活発な若い人たちにとって今や必要不可欠なコミュニケーション・ツールとなった E メールによる“性の健康相談”での性の悩みについての相談、また、39 歳以下を対象とした 無料・匿名の“性の健康相談室”での個別面接相談、検診を通して STD/HIV 感染の発見・予防啓発に努め、若年層における性感染症の蔓延防止に貢献することを目的とした。

1. “性の健康メール相談”に平成 20 年 4 月～21 年 2 月の 11 か月間に寄せられた相談メールは 573 件で、そのうちの 8 割弱は携帯電話からのメールであった。相談者の性別は、男性が 42%、女性が 55%、不明 3%。また、年齢別でみると、本メール相談の主な利用者は 10 代から 20 代前半で、特に 19 歳以下の若年層が一番多く、約 4 割強を占めた。最年少は 13 歳であった。
2. “性の健康相談室”には平成 20 年 4 月～21 年 2 月の 11 か月間に 70 人の受診者が来訪した。相談者の年齢構成、性別は、20 歳代 30 人（男性 6/女性 24）、30 歳代 40 人（24/16）と、女性の割合がやや高く、女性は男性に較べると若い受診者が多かった。またパートナーや友人と一緒に訪れたケースが 9 組（18 人）あった。
3. “性の健康相談室”の情報を得た手段としては、ホームページ（携帯サイトを含む）が約 1/3 で一番多く、次にパートナー・友人からの紹介が約 2 割であった。
4. STD/HIV 感染の診断は、クラミジア抗原（陽性）が 3 人、クラミジア IgA(+)7 人、IgG(+)18 人 IgG (±) 1 人、淋菌（陽性）2 人、HPV 中～高リスク型(陽性)5 人、低リスク型(陽性)3 人、HCV（陽性）1 人の結果となった。その他梅毒、HIV、HSV、HBV の感染はなかった。
なお、低リスク型 HPV 陽性者 3 人は、診察の結果尖型コンジローマと診断された。

本研究も最終年度で、無料・匿名でさまざまな性感染症検査が可能な「性の健康相談室」が若い人々の間で知られる存在となり、前年度までのインターネットで情報を得てやって来る受診者以外に、パートナーや友人と一緒にやってくる受診者や、口コミによる受診者が目立った。性感染症の予防や検査に対する若い人々の意識が徐々に変容してきているのではないだろうか。きちんと対応すべき大事な健康問題であるにもかかわらず、社会でそれが認知されていない現状を少しずつでも変えるべく、予防啓発活動を継続する意義があると考えられる。

参考までに、特定感染症予防指針の推進事業に関して、最も性感染症の多い東京都の発生動向調査は極めて重要であるが、若年層の発生把握が未だ若干低い傾向にある。これに比べ、過去 20 年一部診療所（産婦人科中心）を対象に実施している私が関係している東京都予防医学協会の検査成績では定点に比較して若年層での患者の増加が見られ、疾患別では子宮付属器炎でのクラミジア、淋菌の検出率、不妊患者でのクラミジアの検出率が若干高い傾向が見られた。

A. 研究目的

本研究では、1. 性的活動が一番活発な若年層の一番のコミュニケーション・ツールであるEメールによる「性の健康メール相談」での性の悩み相談を通してのSTD/HIV感染予防・普及啓発、また、2. 「性の健康相談室」での個別面接相談、検診を通してSTD/HIV感染の早期発見・予防啓発に努め、感染者には医療機関の受診・早期治療を勧奨し、若年層における効率的な性感染症の蔓延防止に貢献することを目的とした(図1参照)。

B. 対象・方法

1. Eメールによる「性の健康メール相談」

インターネット・ホームページ(携帯サイトを含む)上より専用メールアドレスsoudan@jifsh.orgへの相談メールを募集し、専門の相談員が回答にあたった。対象は不特定である。

2. 「性の健康相談室」での個別相談、検診

インターネットのホームページ(携帯サイトを含む)、保健所等に紹介カード、パンフレットを配布するなど公告して相談・検診者を募集した。対象は原則39歳以下。電話による完全予約制をとり、相談者同士が顔を合わせないようにプライバシーに配慮した無料・匿名でのSTD/HIVの相談・検診である。募集に応じて来訪した受診者に、質問紙に回答してもらい性行動等に関する調査を行い、検診に先立って担当医が検査について説明し同意を得た上で、診察、検査を実施し、併せてSTD/HIV感染の予防啓発も行った。

検査項目と検査法は表1のとおりである。

C. 研究結果

1. Eメールによる「性の健康メール相談」

平成20年4月から平成21年2月末までに「性の健康メール相談」に寄せられた相談メールは573件であった。月別の相談件数を図2に示した。相談メール件数は10月が一番多く、11～12月は少なかった。相談メールの利用状況を曜日別(図3)、時間別(図4)にみると、木曜日、また21～24時の時間帯の利用が多かった。また、相談者のメールは、約3/4が携帯からの送信であり(図5参照)、主なメール相談利用者で

ある若者にとって携帯電話が身近で利用しやすいツールであることがわかる。

相談者の性別構成を図6に示した。相談件数のうち、男性からの相談が242件(42%)、女性からの相談が313件(55%)、性別不明が18件(3%)で、女性の利用者が半数以上を占めていた。

相談者の年齢は13歳から70歳までと幅広く、平均年齢は全体では22.5歳であった。なお、性別の平均年齢は男性23.0歳、女性22.1歳であった。(図7参照)。いずれにしても、10代後半から20代前半までが本メール相談の主たる利用者であるといえる。

用意したコーディング表をもとに、相談件数を集計したものが表2である。相談内容は1件の相談メールでも多岐に渡ることが多いため、複数該当になっている。

男女ともに多いのは「自覚症状」、「性器」に関する相談であった。やはり何らかの自覚症状があると不安になり、情報を収集・検索し、このメール相談にたどり着き、メールを送ってくると思われる。

男性で多い相談内容は、「精液・射精・早漏」、「HIV感染症/AIDS」、「感染経路」、「オナニー」であった。

一方、女性で多い相談内容は「おりもの」、「生理・排卵」、「検査法・治療法」、「セックス」「妊娠・不妊・不感症」などであった。

STDの疾患では「クラミジア」に関する相談メールが多かった。

メールに返信するにあたり、STD/HIV感染の予防啓発を積極的に推進する一方で、月経・排卵、妊娠・避妊についての正しい知識を広く提供する必要があることも強く実感した。

2. 「性の健康相談室」での個別相談、検診

平成20年4月～平成21年2月の11か月間に70人の受診者が来訪した。その年齢構成、性別は、20歳代30人(男性6/女性24)、30歳代40人(24/16)と、20代の若い年齢層では女性の割合が高く、男性の相談者は年齢が高い傾向にあった。なお10歳代はいなかった(図8参照)。男女比は男性43%、女性57%で(図9参照)、また、カップル・友人同士で9組(18人)が来訪した。

受診者の初交年齢を図 10 に示したが、男性にくらべ女性の方が早い傾向にある。

また、この健康相談室を知った手段については携帯サイトも含めたインターネットのホームページが 35%、友人・パートナーからの紹介が 21%、保健所・区役所からの紹介が 17%を占めた (図 11 参照)。

性感染症の検査結果については、クラミジア病原体検出は 3 名 (男子 2 : 女子 1) で感染率は 5% である (図 12 参照)。その他淋菌感染は 2 名 (女性)、HCV 1 名 (女性) であった。梅毒、HSV1 型・2 型、HBS、HIV については感染者がいなかった。

また、クラミジア IgA 抗体 (+) / IgG 抗体 (+) 7 人 (10%)、(-) / (+) 11 人 (16%)、(-) / (±) 1 人、(-) / (-) 51 人 (図 13 参照)。HPV 中～高リスク(陽性) 5 人 (図 14 参照)、低リスク(陽性) 3 人 (尖圭コンジローマ) の結果となった。

D. 考察

1. E メールによる“性の健康メール相談”

性の健康メール相談の内容をみると、性交経験が年々若年齢化している一方で、月経や性交に伴う妊娠や病気のリスク、その予防のためのコンドーム使用に関する教育・指導が十分に行なわれていない現状は明白である。学校の性教育担当者が現場で難しい立場に置かれていることは理解しているが、若者に対する STD/HIV 予防啓発を進めていくには、他人事ではなく自分自身の大事な問題として対応するように、より具体的な予防法など、家庭と連携した、積極的な性教育が望まれる。

また、有害な情報や出会い系サイト等の負の面は確かに多いが、若年層においては、今やインターネットや携帯電話は必須なツールとなっている。若い人たちが一番身近な情報取得ツール、コミュニケーション・ツールとしているからには、彼らに関心をもつようなインターネットサイト・携帯サイトを構築して、もっと気軽に性感染症の相談ができる場を提供することは、若年層における性感染症蔓延を防止する一助となろう。

2. “性の健康相談室”での個別相談、検診

無症状のことが多い STD/HIV 感染では、受診者を増やすことは確かに難しいが、1 人ではなくカップルでの受診が増えれば、ピンポン感染を防止できるし、より効率的な感染の発見・治療・予防啓発に直結し、性感染症の蔓延防止策として有効であろう。

性感染症の蔓延を防止するには、若い人々をターゲットに性感染症という疾患の重大性をアピールし、行政が積極的・継続的に匿名、無料の相談・検診の場を拡充・整備・提供していく必要がある。

E. 結論

以上の研究結果から、若年層における効果的な性感染症の蔓延防止策として、携帯サイトを中心としたインターネットの活用が有効であり、検査機会の継続的な提供が必要であると考えられる。

また、1 人ではなくカップルや友人同士での相談・検診を積極的に推進すれば、より効果的な蔓延防止策となる。

性感染症の発生動向については、性器クラミジア感染症は 2002 年をピークにして歯止めがかかったといわれているが、本研究結果でも減少傾向にある。

F. 発表 (原著論文、総説、学会発表)

文献

- 1) 松田静治：若い世代にふえている！家族で考えたい性感染症，クリニック Q&A，547，2-5，2009。
- 2) 松田静治：東京におけるクラミジアトラコマチスおよび淋菌検査の実施成績，東京都予防医学協会年報 2008 年版，第 37 号，110-113，2008。
- 3) 松田静治：性感染症の最近の動向，臨床婦人科産科，63 巻，2 号，110-115，2009。
- 4) 松田静治：性感染症の最近の動向，臨床とウイルス，36 巻，5 号，361-367，2008。

学会発表など

- 1) 松田静治：第 10 回性科学セミナー，最近の性感染症—若年層を中心に，平成 20 年 10 月 4 日 (於：京都)。

図1 研究の目的・方法



図2 Eメール - 月別相談件数

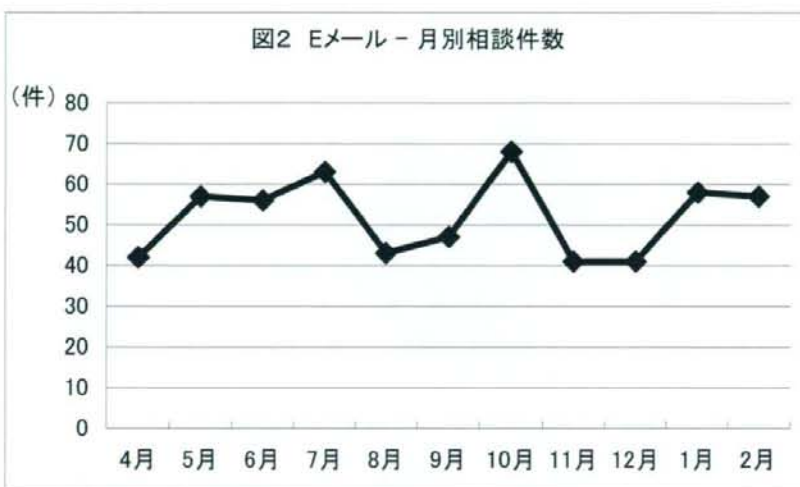


図3 Eメール - 曜日別相談件数

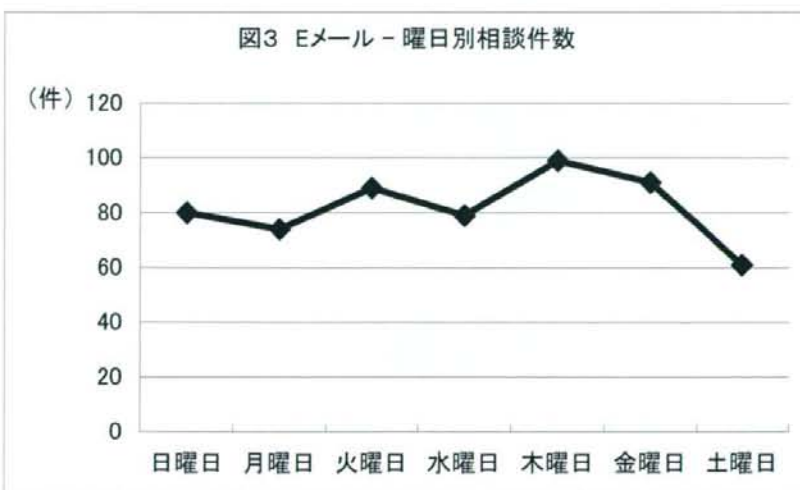


図4 Eメール - 受信時刻別件数

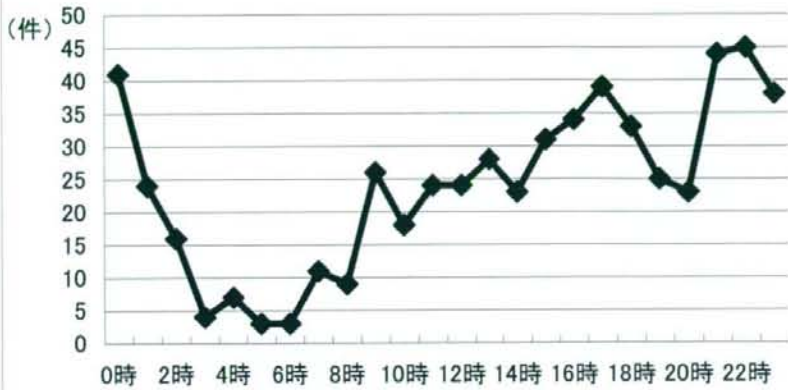


図5 Eメール - 相談者のメールキャリア

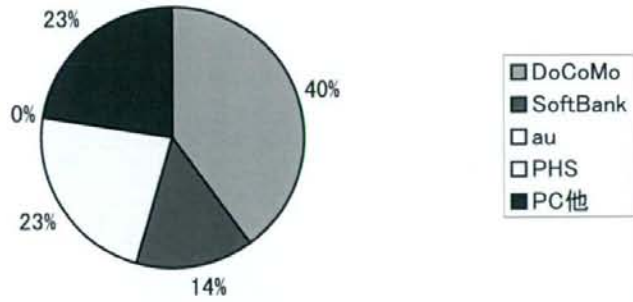


図6 Eメール - 相談者の性別

